

金栗四三著作目録

A Bibliography of KANAKURI Shiso's Writings

SHIMOMURA, Mitsutoshi

霜 村 光 寿

図書館学課程非常勤講師

抄録：

金栗四三は、戦前にはマラソン選手としてオリンピックに出場するほどの活躍を遂げ、その後は箱根駅伝を発案するなど、日本における陸上競技の普及に大きく貢献した。その業績から日本の「マラソンの父」とも呼ばれ、2019年のNHK大河ドラマの主人公として取り上げられるなど注目されているが、金栗についての体系的な研究はまだ少ない。今後の金栗研究の発展に寄与すべく、本稿では金栗の著作を中心に文献目録を作成した。

Abstract：

KANAKURI Shiso, who played an active part in the Olympics as a marathoner prior to World War II, was also the creator of the Hakone long distance relay race. Contributing significantly to the promotion of athletic sports in Japan, he was called the “Father of Marathons” in Japan for his accomplishments. Today, he is attracting increased attention thanks to him being featured in NHK’s year-long historical drama in 2019. However, there is very little structured research on KANAKURI. This paper presents a bibliography focused on KANAKURI’s writing with the goal of contributing to future advances in research on him.

キーワード：金栗四三、文献目録、評伝、スポーツ史、オリンピック・パラリンピック

Keywords： KANAKURI Shiso, bibliography, biography, sports history, Olympic/Paralympic Games

はじめに

金栗四三（1891.8.20-1983.11.13）は、戦前にはオリンピックに出場するなど、日本を代表する

マラソン選手として活躍を遂げた。その後、箱根駅伝を発案するなどし、戦前・戦後を通して日本での陸上競技の普及に大きく尽力した。その業績から日本の「マラソンの父」とも呼ばれ、2019年のNHK大河ドラマの主人公として取り上げられるなど注目されているが¹、本文中で触れるように金栗についての体系的な研究はまだ少ない。

金栗は戦前・戦後と日本陸上界の重鎮であったため、著作は決して少なくない。筆者はこれまで人物史研究を行い²、またスポーツ史に関してはスポーツ人の思想分析や文献目録の作成を行った³。人物史研究を行うにあたって、本人の著作を分析することは必須であり、大変有用である。そこに資するため、まとまった形での金栗四三の著作に関する目録の作成を行うこととした。

目録の作成にあたっては基礎的情報として、国立国会図書館の「NDLオンライン」および「国立国会図書館デジタルライブラリー」、国立情報学研究所のCiNii、皓星社の「ざっさくプラス」(雑誌記事索引集成データベース)を参照した⁴。なお、本来であれば採録基準等も厳密に定めるべきであるが、時間の制約もありさしあたり次のようにした。期間は生年より現在までとした(2018年10月1日現在判明しているもの)。刊行形態としては、図書および雑誌記事を採録対象とした。また、著作目録という意味では本人著作のみでも問題はないが、研究状況の把握のため、研究や評伝も含めることとした。筆者が現物(含むデジタルデータ)を確認したものは、図書は全体のページ数を、雑誌記事には開始ページに加え終了ページを記した。配列は年代順とし、利便性を考えそれぞれの項目ごとに通し番号を付した(項目は「本人著作図書」、「本人著作雑誌記事」、「評伝図書」、「評伝雑誌記事」の4つに大別)。漢字の旧字体は新字体に改めた。

1. 金栗四三(かなくり・しそう)略年譜⁵

- | | |
|-----------|---|
| 1891.8.20 | 熊本県春富村(現・和水町)に生まれる |
| 1910 | 東京高等師範学校入学 |
| 1912 | 第5回オリンピックストックホルム大会にマラソン選手として出場 |
| 1914 | 東京高等師範学校卒業
神奈川師範学校などで教員を務めながら練習 |
| 1920 | 第7回オリンピックアントワープ大会出場
東京箱根間往復駅伝競走(箱根駅伝)を企画 |
| 1921 | 東京府女子師範学校教員となる。全国マラソン連盟を設立、初代会長。 |
| 1924 | 第8回オリンピックパリ大会出場。選手を引退、指導者となる。 |
| 1930 | 教員を退職。翌年郷里へ戻る。 |
| 1936 | 東京でのオリンピック開催決定、準備のため上京。 |
| 1937 | 東京十文字女学校に勤務 |
| 1941 | 青葉女学校に勤務 |
| 1945 | 退職、郷里に戻る |

- 1946 熊本県体育協会発足，初代会長。
- 1947 熊本県陸上競技協会第2代会長。朝日マラソンを創設，熊本で開催。
- 1948 熊本県初代教育委員長
- 1955 秩父宮賞，紫綬褒章
- 1962 玉名市名誉市民
- 1964 勲四等旭日小綬賞
- 1973 玉名市陸上競技協会顧問
- 1983.11.13 死去。従五位銀杯下賜。

2. 目 録

2.1. 本人著作

2.1.1. 図 書

2.1.1.1. 単 著

- (1) 『小学校に於ける競技と其の指導法』現代教育主要問題叢書第2編（南光社，1924，125p.）

2.1.1.2. その他

- (2) 『ランニング』（菊屋出版部，1916，151p.）
明石和衛との共著
- (3) マーフィー著，金栗四三，石貫鉄心訳『オリンピック競技法』（菊屋出版部，1919）
- (4) 『オリムピックみやげ—第八回巴里大会記念—』第2輯（大阪毎日新聞社，1924，301p.）
金栗四三「私のマラソン練習」p.41-51.
- (5) 稲葉言治『運動競技資料とオリムピック事情1936』（東京毎夕新聞社，1936，100p.）
金栗が監修を担当。各地方新聞社出版のものが存在する。
- (6) 大島十九郎編『オリンピック写真史大観—第十二回オリンピック東京大会招致記念事業—』（明治天皇聖徳奉賛会，1938，本編ページ付けなし+記事編64p.）
金栗四三「ストックホルムの思出」，記事編 p.17-18.
- (7) 日本児童文学者協会編『ここに光を1年生』（実業之日本社，1958，155p.）
金栗四三「はじめてのまらそんせんしゅ」p.57-62.
- (8) オリムピック写真史刊行会編『近代オリンピック写真史』（同胞之会出版部，1964，95p.）
第5回出場選手金栗四三「ストックホルムの思い出」p.9.
- (9) 一中競走部史編纂室『愛知一中競走部史』（一中競走部編纂室，1966，634p.）
金栗四三「祝辞」p.4.
- (10) 大谷武一体育選集刊行会編『大谷武一体育選集』別冊（杏林書院体育の科学社，1967，396p.）
金栗四三「大谷さんの思い出」p.215-216.

2.1.2. 雑誌記事

- (1) 「万国競技会に我が選手を代表登場して日本人の体力劣弱なるを憤慨す」『実業之日本』第16巻第1号, 1913.1, p.155-158.
- (2) 「痛快なる国際競技 附・競技種目の説明」『柔道』第2巻第9号(柔道界本部), 1916.9, p.38-43.
- (3) 「鉄脚一駆英国を縦走せん」『新青年』第1巻第5号, 1920.5
- (4) 「国際競技出場記」『日本少年』第16巻第1号, 1921.1
- (5) 「私の寒中生活」『新小説』第26年第2号, 1921.2
- (6) 「新年大附録 卓上オリンピック大会 卓上オリンピック大会遊び方」『少年倶楽部』第9巻第1号, 1922.1, p.92-93.
本文に署名なし。目次より、著者が野口源三郎と金栗、横田桃水案、小林永二郎画。
- (7) 「競争の出発と決勝」『新小説』第27年第1号, 1922.1
- (8) 「第六回極東大会に際して」『柔道』第2巻第5号(講道館文化会), 1923.5, p.53-54.
- (9) 「マラソンの敗因に就いて」『野球界』第14巻第14号, 1924.11, p.23.
- (10) 「マラソン競走の思出」『青年』第9巻第7号, 1924.7
- (11) 「マラソン選手の見たる道路」『道路の改良』第6巻第12号, 1924.12
- (12) 氏原佐蔵, 岩原拓, 針重敬喜, 伊藤長七, 野口源三郎, 澤田一郎, 金栗四三, 植村陸男, 羽仁吉一, 羽仁もと子「座談会 運動競技の利害について—三月二十二日夜自由学園の一室にて—」『婦人之友』第21巻第5号, 1927.5, p.4-18.
- (13) 「陸上競技の戦跡」『アスレチックス』第5巻第10号, 1927.10, p.10-19.
第8回極東選手権大会に関する記述。
- (14) 白石実三ほか「(一) 現代青年の信条とすべきものについて (二) 現代青年の教養として、如何なる方面に一層力を注ぐ必要を感せられつつありや。」『青年』第13巻第1号, 1928.1
- (15) 「講演 運動競技に就いて」『沖縄教育』第195号, 1932.6
- (16) 「ストックホルム大会初参加」『オリムピック』第16巻第8号, 1938.8, p.38-39.
第5回オリンピックストックホルム大会の回想。
- (17) 「駅伝特集 青森 - 東京駅伝」『陸上競技マガジン』第2巻第1号, 1952.2, p.25-25.
- (18) 「日本のマラソンものがたり」『中学時代』第5巻第5号, 1953.8, p.60-63.
- (19) 金栗四三, 山田敬蔵, 西田勝雄, 浜村秀雄, 貞永信義「座談会 高きかかげよマラソン日本の名」『6年の学習』第10巻第1号, 1955.4, p.54-58.
- (20) 「私のスポーツ回想 (1) —マラソン—」『中学時代』第7巻第1号, 1955.4, p.84-88.
- (21) 「運動実話 ポストンを疾走する世界一のマラソン足袋」『面白倶楽部』第8巻第8号, 1955.7, p.222-226.
- (22) 「初のオリンピックマラソン」『セメント工業』第21号, 1956.7, p.28-28.
- (23) 「マラソンの思出」『体育の科学』第6巻第8号, 1956.8, p.306-307.
- (24) 「特集マラソン・駅伝競走の解説 マラソンの指導について」『体育科教育』第5巻第2号,

1957.1, p.16-20.

- (25) 「マラソンをやる時の呼吸について」『体育科教育』第5巻第5号, 1957.4, p.58-59.
読者丸山袈裟雄からの質問「マラソンの「呼吸法」と「外傷又は障害」について」への回答。
- (26) 「第5回オリンピックの思い出」『新体育』第31巻第6号, 1961.6, p.94-98.
- (27) 「半世紀前のオリンピック初出場」『体育科教育』第10巻第4号, 1962.3, p.4-7.
- (28) 「オリンピックの思い出(1)先駆者の悩み」『東京オリンピック』第14号, 1963.2, p.19-21.
- (29) 「岡部平太の横顔」『体育科教育』第11巻第3号, 1963.2, p.26-27.
- (30) 「特集座談会 日本民族の祭典・オリンピックの英雄たち」『文藝春秋』第41巻第7号, 1963.7, p.216-258. 金栗のほかに, 遊佐幸平, 熊谷一弥, 鶴田義行, 高石勝男, 織田幹雄, 南部忠平, 村社講平など。
- (31) 「美しい話・思い出話 つらくてもがんばれ!!」『小学四年生』第43巻第3号, 1964.6, p.54-55.
- (32) 「わたしのすすめる運動」『教育心理』第15巻第5号, 1967.5, p.35-35.
- (33) 「嘉納師範歿後三十周年に想う」『柔道』第39巻第5号(講道館), 1968.5, p.4-6.
- (34) 「日本陸上界大先輩との対話 声望高いマラソン王・金栗四三」『陸上競技マガジン』第23巻第1号, 1973.1, p.84-86.
北沢清による金栗へのインタビュー記事。

2.2. 評伝等

2.2.1. 図 書

2.2.1.1. 1冊のすべてもしくは大部分を金栗評伝に充てたもの

- (1) 豊福一喜, 長谷川孝道『走れ25万キローマラソンの父金栗四三伝一』(講談社, 1961, 277p.)
- (2) 浜野卓也『ノンフィクション・シリーズかがやく心 走ったぞ! 地球25万キローマラソンの父・金栗四三一』(佼成出版社, 1984)
- (3) 玉名市立歴史博物館ころろピア編『「マラソンの父・金栗四三25万キロの人生」展』(玉名市立歴史博物館ころろピア, 2002, 24p.)
- (4) 三加和町・三加和町教育委員会編『金栗四三翁遺品展図録』(三加和町教育委員会, 2003)
- (5) 佐山和夫『箱根駅伝に賭けた夢―消えたオリンピック走者―金栗四三がおこした奇跡一』(講談社, 2011)
- (6) 長谷川孝道『走れ二十五万キローマラソンの父金栗四三伝一』(熊本日日新聞社, 2013)
- (7) 佐山和夫『箱根駅伝に賭けた夢―消えたオリンピック走者―金栗四三がおこした奇跡一』(講談社, 2013)
- (8) 佐山和夫『金栗四三―消えたオリンピック走者一』(潮出版社, 2017)

- (9) 長谷川孝道『走れ二十五万キロ—マラソンの父金栗四三伝—』(熊本日日新聞社, 2018)
- (10) 近藤隆夫『金栗四三の生涯—「マラソンの父」の波乱の人生—』(洋泉社, 2018.8)
- (11) 近藤隆夫『伝説のオリンピックランナー“いだてん”金栗四三』(汐文社, 2018.9, 193p.)
- (12) 青山誠『金栗四三と田畑政治—東京オリンピックを実現した男たち—』(KADOKAWA, 2018.9)
- (13) 佐山和夫原案『金栗四三物語—日本初のオリンピックマラソンランナー—』(小学館, 2018.10)
- (14) 佐山和夫『金栗四三—消えたオリンピック走者—』(潮文庫, 2018.11)

2.2.1.2. 複数の人物を集めた評伝の一部もしくは他者評伝中の記述に登場など

- (15) 中村祥一郎『私たちのほこり 9 日本のほこるスポーツマン』(東西文明社, 1956, 213p.)
「金栗四三選手」p. 110-114.
- (16) 豊福一喜『熊本名匠伝』(金竜堂書店, 1961, 277p.)
「マラソン王金栗四三」p. 101-117.
- (17) ドキュメント人と業績大事典編集委員会編『ドキュメント人と業績大事典』第6巻(ナダ出版センター, 2000)
「金栗四三」p. 246.
- (18) 日本オリンピック・アカデミー編『21世紀オリンピック豆事典—オリンピックを知ろう!—』(楽, 2004)
「金栗四三—マラソンの父—」p. 74.
- (19) 武田薫『マラソンと日本人』(朝日新聞出版, 2016)
第2章「金栗四三—学生の大志と箱根駅伝—」p. 25-54.
- (20) 日本オリンピック・アカデミー監修『ほんとうにあったオリンピックストーリーズ』(講談社, 2016)
「世界一おそいタイム 1912年ストックホルム」p. 54-63.
- (21) 日本オリンピック・アカデミー編著『JOA オリンピック小事典 The Comprehensive Guide to the Olympic Movement』(メディアパル, 2016)
「記憶にのこるオリンピック・パラリンピックの選手たち 日本人選手(夏季) 金栗四三／熊谷一弥」p.240.
- (22) 早坂隆『最後の箱根駅伝—昭和十八年の冬 戦時下でつながれたタスキ—』(中央公論新社, 2016.9)
- (23) 池井優『近代オリンピックのヒーローとヒロイン』(慶應義塾大学出版会, 2016.12)
第3章「金栗四三—日本マラソンの父—となったオリンピックの敗者—」p. 41-56.
- (24) 真田久監修『小学館版学習まんが人物館 嘉納治五郎』(小学館, 2018.6)
第4章「アジア人初のIOC委員」(p. 94-115.)の中に三島弥彦と金栗に関する記述あり。
- (25) コンデックス情報研究所編『話したくなるオリンピックの歴史』(清水書院, 2018.7)

第1章「オリンピックの歴史をのぞいてみよう」中「マラソン選手が消えた！54年かけて完走！？」 p.28-29.

2.2.1.3. 金栗の動向を伝える記事など

- (25) 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史通史編』第9巻現代2(熊本市, 2000年)
「マラソンの父金栗四三翁逝く」 p.478.
- (26) 桑原憲彰監修『目で見える山鹿・荒尾・玉名の100年』(郷土出版社, 2001年)
「玉名高校陸上部を指導する金栗四三」 p.111.
- (27) 渡辺隆喜監修『目で見える東村山・東大和・武蔵村山の100年』(郷土出版社, 2003年)
「金栗四三さんを迎えた第一回狭山湖駅伝大会」 p.89.
- (28) 日本体育協会『日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史1911→2011』part1(日本体育協会, 2012年)
「短距離の三島弥彦, マラソンの金栗四三, とともに力を出せず」 p.1212.

2.2.2. 雑誌記事

- (1) 著者不明「一里を十六分で走つたマラソン競争優勝者—日本代表選手金栗四三—」『日本少年』第7巻第14号, 1912.12
- (2) 無記名, 特集「各方面に亘日本一の人物—競技界に於ける日本一—」中「マラソン金栗四三」『日本一』(南北社か)第2巻第10号, 1916.10
- (3) 無記名, 特集「学生会逸話」中「金栗四三君」『雄弁』第5巻第6号, 1914.6, p.308-309.
- (4) 野口源三郎「学校体育に寄与した人々—金栗四三—」『学校体育』第4巻第7号, 1951.8, p.23-26.
- (5) 神田学人「マラソン王金栗四三氏に学ぶ」『弘道』第71巻第744号, 1962.10, p.29-29.
- (6) アイラ・ウルファード「日本マラソン界の父 金栗四三」『リーダーズダイジェスト』第22巻第11号, 1967.11, p.37-43.
- (7) 石田芳正「50歳記念現役復帰マラソン 第3回防府マラソンと金栗四三, そして私」『陸上競技マガジン』第23巻第2号, 1973.2, p.58-59.
- (8) 内尾亨「マラソンの父・金栗四三翁 ゴールインした92歳のマラソン人生—日本マラソンの父 金栗四三氏逝く—」『陸上競技マガジン』第34巻第1号, 1984.1, p.197-198.
- (9) 秋吉嘉範「陸上競技人の思想と背景に関する研究(1) 金栗四三のマラソンしごとと人生背景」『体育・スポーツ哲学研究』6and7, 1985, p.37-43.
- (10) 橋本明「スポーツの世界(9) 金栗四三」『通信協会雑誌』9月第1000号, 1994.9, p.68-69.
- (11) 水谷豊, 有吉正博「熊本が生んだマラソン王「金栗四三」を語る」『日本体育学会大会号』第54号, 2003, p.96.
- (12) 有吉正博「過去の名ランナーの生活 マラソンの父「金栗四三」に学ぶ, ランナーの生活」『ランニングの世界』第11号, 2011.4, p.94.

- (13) 満園文博「1912年に五輪に出た日本男児「日本マラソンの父」金栗四三の数奇なる100年」『週刊新潮』第57巻第17号, 2012.5.3・10, p.62.

3. 資料について

上記資料に関してすべてに触れることは紙面の都合上今回は割愛せざるを得ないが、若干の説明を試みる。本人著作と評伝それぞれに分け、内容の傾向について少し触れておく。いずれも書誌の特定は、上記目録「本人著作図書」「本人著作雑誌記事」「評伝図書」「評伝雑誌記事」の項目ごとに通し番号を振ったので、それに基づいている。

3.1. 本人著作

本人の著作で図書の形態となっているもののうち、金栗が単独で編んだものは極めて少なく、本人著作図書(1)のみである。その他で比較的単独の著書に近い性格ものは同(2)と(3)であり、いずれも陸上競技法の解説とみられる。

本人の著作について内容で分類すると、競技・競技法の解説と、自身が参加した大会等に関する回想に大きく二分される。金栗の競技者としての生活は長くないので、現役時代の著作はそれほど多くないが、回想はかなり多いといえる。特に、戦前の日本で最初期にオリンピックに参加した選手であり、そのことについて寄稿を求められたりインタビューに応じたりしたものも多い。

本人著作図書(7)は児童向けの図書であり、金栗の文章も児童向けに平易に書かれている。雑誌でも同様に(18)~(20)、(31)は青少年向けの雑誌で、いわば偉人の話として掲載されており、金栗が戦後、スポーツ界の第一人者として認識されていることがわかる。

3.2. 評伝等

金栗には厳密な意味での自伝はないが、熊本日日新聞に連載された金栗の聞き書きをまとめた評伝図書(1)は表紙に「本人閲」とあり、これが事実上の自伝とあってよい⁶。同書はその後復刊され、評伝図書(6)(9)がそれに相当する。

他者による評伝で代表的なものは、佐山和夫によるものであろう。2011年に刊行された評伝図書(5)がそれであり、同(7)として改版され、(8)は別の出版社から発行され、(14)は同書の文庫化とみられる。

金栗は箱根駅伝の発案に関わったこともあり、佐山書も講談社版ではタイトルに箱根駅伝の文字が見られる。また、武田薫による評伝図書(5)も、箱根駅伝との関係を中心に述べられている。

周知の通り、金栗は田畑政治とともに2019年のNHK大河ドラマの主人公とされたこともあり、2018年はそれを見込んでの出版も相次いだ。一般向けのムックとしては、近藤隆夫による評伝図書(11)が発行され、またドラマの主人公2名を扱ったものとして青山誠による同(12)がある。

児童書は個人の評伝としては多いほうであろう。古いものでは評伝図書(2)が1984年と、没後間もなく刊行されている。いちばん多いのがオリンピックを題材とした書籍で、同(20)(24)などに金栗に関する記述が見られる。小学生向けの学習漫画では、嘉納治五郎の生涯を描いた同(24)で、金栗に関しても比較的分量を割いている。1冊全体を金栗に充てたものでは、近藤による同(11)が出版され、これは同氏の著書および佐山書をベースに書かれている。変わり種としては同(13)のコミックが挙げられるが、金栗の評伝は全体的に同(1)をはじめとした豊福・長谷川書や佐山書を主要な参考文献としているものがほとんどである。

金栗四三という人物に対する学術的研究はこれまでにあまり例がなく、秋吉嘉範による評伝雑誌記事(9)がほぼ唯一のものといってよいだろう。しかしながら、研究者によるものではなくとも、前掲の武田書などは一次史料にも当たっており、学術的色合いが濃い。

金栗の動向を伝える記事(評伝図書25~28)は近年の図書に掲載されたものであるが、古い記事を収録し直したものが多く、性格としては史料といえる。

おわりに

以上、本稿では金栗四三の著作を中心に目録を作成した。金栗の著作だけでも少なくないことがおわかりいただけたかと思う。

一方で、今回の目録では網羅できなかった面も否定できない。今回割愛せざるを得なかったもののうち、重要と考えられるのは新聞記事である。新聞記事は、大手3社のオンラインデータベースで「金栗四三」のキーワードで検索したところ、いずれも最終閲覧日現在の記事数は朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル」で443件(うち戦前のは243件)、読売新聞「ヨミダス歴史館」で508件⁷(うち戦前116件)、毎日新聞「毎索」で75件(戦前17件)であった。これらのうち特に戦前のは、金栗がオリンピックでの状況をほぼリアルタイムで伝えているものなどもあり、史料としての価値が非常に高いことから、戦前の選手としての金栗像を浮かび上がらせるために重要であり、加えて戦前のオリンピック研究にも有益であると考えられる。

そして今回は雑誌、特にスポーツ関係のものについてもあまり触れることができなかった。本文中では、戦前のものでは本人著作雑誌記事(13)(16)などはそれに該当するが、これは以前筆者が編んだ目録から抽出したものである⁸。同目録は、大日本体育協会の機関誌であった『アスレックス』『オリムピック』『体育日本』から、日本人が参加したスポーツの国際競技大会に関する記事を集めたものである。したがって、それ以外の金栗に関する記事は拾えていないので、遺漏がある可能性がある。他にも戦前のスポーツ総合誌である『アサヒスポーツ』などにも記述があると考えられるので、他日を期したい。

なお、今回は採録できなかったが、公共図書館でも郷土資料として所蔵するなど、刊行資料でない図書類も探す必要がある。また、本稿で対象とした刊行資料という視点からはやや外れるものの、一次史料という意味では博物館資料も決して無視できない。博物館資料としてもっとも多く所蔵しているのは、熊本の玉名市立歴史博物館ころピアと和木町役場である。これら博物館

の収蔵品情報も集約していく必要があるであろう⁹。

今回は網羅的にはできなかったが、本稿で掲載した資料も本人が述べたものも少なくなく、金栗の足跡を知る上での重要な手がかりとなる。これらの資料が活用され、また筆者自身も活用しつつ、今後さらに調査を進め金栗研究の発展に寄与できればと考える。

注

- 1 2019年NHK大河ドラマ「いだてん—東京オリンピック囃し—」。制作発表は2016年11月。同ドラマの情報については、NHKオンライン「NHK_PR いだてん」(<http://www6.nhk.or.jp/nhkpr/tag/index.html?i=09835>)を参照した。
- 2 拙著『金森徳次郎の憲法思想の史的研究』(同成社、2014)。
- 3 拙稿「戦前のスポーツ国際競技大会参加旅程に見る異文化交流—野口源三郎の手記を中心に— 付表：大日本体育協会機関誌における日本人が参加した国際スポーツ競技大会に関する記事目録」、日本大学文理学部私立大学戦略的研究基盤形成支援事業日本史研究グループ編『日本における都市形成と異文化交流』(同グループ、2013)。
- 4 インターネット情報およびオンラインデータベースの最終閲覧日は2018年10月13日。
- 5 主に、『日本近現代人名辞典』(吉川弘文館、2001)および『20世紀日本人名事典 あ～せ』(日外アソシエーツ、2004)、玉名市「マラソンの父 金栗四三さん」(<https://www.city.tamana.lg.jp/q/aview/112/2193.html>)を参照した。なお、『スポーツ人名事典 新訂第3版』(日外アソシエーツ、2002)では採録基準から外れているようで金栗に関する項目はなかった。「金栗四三」の読みについては、苗字に「かなぐり」「かなぐり」、名「しぞう」「しそろう」などいくつか存在するが、本稿では玉名市による表記の決定(前掲、玉名市ホームページ)「かなぐり・しそろう」に従った。この他に金栗に関するインターネット情報の公的なものとしては、和木町「いだてん—日本マラソンの父「金栗四三ミュージアム」—」(<http://www.kanakurishiso.jp/>)がある。
- 6 金栗の資料状況については、武田薫『マラソンと日本人』(朝日新聞出版、2014) p.26.でも触れられているので参照した。
- 7 なお、読売新聞では2018年8月27日より夕刊にて、堂場瞬一による金栗を主人公とした小説の連載が開始されており、最終閲覧日以降現在も件数は増えていると考えられる。
- 8 前掲注2の拙稿の後半部分。
- 9 なお、玉名市立歴史博物館こころピアにおける、金栗関係の収蔵品の全体についての目録はないが、同館紀要に掲載された毎年の収蔵品目録から金栗のものを集めれば全体の目録にはなるとみられる。この点に関しては、同館訪問時(2018年3月3日)に学芸員野中捺貴氏にご教示いただいた。